黄色い娼婦

森　万紀子

黄色い娼婦

森　万紀子

文藝春秋刊

著者略歴
昭和9年山形県生れ。山形県立酒田東高校卒
本名松浦栄子
表題作「黄色い娼婦」は第65回芥川賞候補作品
〈著書〉 密約
〈現住所〉 東京都豊島区高松2-20 羽馬多久荘2号

黄色い娼婦

昭和四十六年九月五日 第一刷
昭和四十七年三月二十日 第三刷

定価 七〇〇円

著者 森 万紀子

発行者 樫原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五局二二一一
郵便番号一〇二

印刷 図書印刷
製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© 1971 Makiko Mori Printed in Japan

0093-302070-7384

〈黄色い娼婦〉目次

黄色い娼婦　5
日曜日　143
人の立つ橋　165
残骸の町　211
あとがき　268

裝幀 司 修

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

黄色い娼婦

森万紀子作品集

黄色い娼婦

一

おびただしい汗の中で人混みから浮き上ろうと蹠いていた。
長い間、そうしていた気がする。流れた汗がすでに水となり、冷えが底から背中に貼りついて来る。離れようと何度も慎子は体をよじった。
「——ほら、やってる。あの動きが終ると意識が戻るわ」
「目を覚まそうとしているんだろ」
「ああして泳ぐような格好をするとすぐよ」
上を盛んに言葉が行き来した。そこ迄、浮き上ったと思った時、にわかに視界は開けた。
今、押し分けた無数の顔が、一旦壁の所まで引いて行ったかのように、数え切れない顔がクリ

ーム色の壁に貼ってある。どれも、こちらを見つめ笑っていた。
頭を擡げ慎子は自分の周囲に開けた、どんよりくすんだ眺めを見廻した。
縦に長い小さな部屋である。ベッドの頭の部分は町の大通りに面して窓が切られ、廊下側の引戸には、大きな二枚の透明な硝子がはめ込まれている。ひっきりなしに人の行き来があった。
上半身を起こそうとすると汗の流れと一緒に力が抜け落ちて行く。
傾いた姿勢のまま、ぼんやり前を見、慎子は抜け落ちて行くその音を聞いた。

「——気がついたぜ」
「ああしてじっと、ここがどこか、うかがってるのよ。意識が戻った最初はどの患者もそう」
声に向け顔を動かすと、吹き出していた汗が目の中に流れ込んだ。
壁に貼られた無数の笑顔も、硝子戸も、今の男女の言葉も、水面の向うに揺れながら遠のいて行く。周囲に開けた眺めから、再び自分だけが沈んで行く。
「……拭いて下さい」
叫んだ。
「何度も拭いてあげてるわ。さっきから。ただ、あなたのは切りがないのよ」
「いいじゃないか。拭いてやれよ。この女のタオルあるんだろう」
声と一緒に部屋の隅から、二人の足音が近づいて来た。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

「こういう時は汗を流すだけ流さなければ駄目。それが回復に向う一つの徴候なんだから」
ベッドの上に体を傾けたままでいると、汗は肌を真直ぐ伝わり下着にしみ込んで行く。額から流れ、目の中に入り、溜っては流れ、溢れては流れる。目の前はまた、揺れる水面だけになった。目を開いて、見えるのは波状の動きだけである。長いこと慎子は、その動きを眺めた。
「拭いてやれよ。ぎゅっと力を入れて押えるようにしたら汗の出方が違うから」
「これ一回だけよ」
冷えたタオルが顔にかけられ、そしてすぐ剝がされた。にわかに鮮明になった周囲が迫って来る。硝子戸には、ベッドの枕元で盛んに話す警官と看護婦の姿が写っている。
「ほら又、ああして私達を見てるわ」
「不思議だと思ってるんだろ。意識を回復すれば知らない所に寝ているしな」
「わかりますか。ここどこか」
看護婦は慎子を真正面から見つめていた。
「ね。どこ。ここ」
「わかりゃしないよ」
二人の声は隙間から待合室へ流れて行く。流れて行くその先を慎子は眺めた。こちら側に背を向け、ベンチに坐る大勢の病人の黒い固まりがあった。警官と看護婦の姿が、それに重なりながら硝子戸に写る。
「厭ね。いつ迄もじっとああしてるの。睨んでるのよ、私達を」

「俺達をか」
「そう、硝子戸に写る私達をよ」
しわがれた二人の声を慎子は聞いた。
顔を上げていると、目の前にある硝子戸のその四角い面の中に、ただ二人の姿が入って来るだけである。こうして体が傾き顔を上げている間中、写って来る二人の姿を見続けることになる。
看護婦の念を押す声が又上った。
「ね？」
「わかります」
相変らず真直ぐ見たまま慎子は答えた。
「そう云うと思ったわ。最初は誰だって、わかると云い張るものなのよ。憎らしくなるくらい、自分を取り繕おうとするのよ」
警官は側に来て慎子の肩をゆさぶった。
「君がいつも目を覚ます自分の家とは違うだろうが」
ゆさぶられるつど、周囲はぐらぐら揺れ動く。
「目を覚ました場所がいつもと違うだろうと聞いてるのさ」
いら立つ彼の声が上った。
「違います。それは、いつも」
慎子は答えた。朝、起きると、自分を取り巻く部屋のたたずまいは常に異なる。そう云おうと

して二人を眺めた。だが結局、違わなかったのかも知れない。前の夜、初めて会った男も、会った瞬間から特徴は見慣れ、朝、側に横たわるその男は、どれもみな同じ男の形になっている。新しい部屋のたたずまいも、見れば見る程珍しさは薄れて行き、結局、木と釘のどれも同じ最初の形に戻って行く。

周囲がみな付着物を振り落としながら、最初の姿に帰るそのせわしい音を、慎子は朝、立ち去る時、必ず背後に聞いた。

「そんなふうに何を云ったっていいわよ。通じない勝手なことを話して自分を繕おうとするだけだから。汗が出ている間は、見ていると、どの患者もそう」

「じゃあ、窓を開けて涼しくしろよ」

警官に云われ、看護婦は立って行き、窓を開けた。

風と一緒に騒音が勢いよく流れ込んで来る。大通りに面しているせいなのか、車の地響きが床を伝わり這い上って来る。壁に貼られた無数の笑顔が、そのつどざわめいた。どの顔も何かの始まりを待っているように思える。ひらひら揺れる一枚一枚を慎子は目で追った。

「私が動くと、ああして目で追って来るの。どうしてなの」

看護婦は慎子を指差した。

「用事があるんだろう。何か」

「何もないはずよ。汗が出なくなったんだから」

だが彼女は側に来た。何もなかった。

「ない」
慎子は首を振った。ただ、自分はこうして黙っていていいのかと思う。
「ずっとこうしていて……いいの？」
「悪いと云ったらどうする気だろ」
離れて行くだけである。窓から入って来、そして出て行く町の騒音に引きずられながら、ここを去り人の群れの中に戻る。ベッドの上で体を動かし、慎子は自分の服を捜した。着ている病院の番号の入った浴衣は、汗で湿り肌にまつわりついて来る。
「あなたの服は隣の患者さんと一緒になってるの。丁度ここに同じ頃運び込まれたから」
取って来て上げる——看護婦は隣室との境のドアを開けた。いきなり裂くような悲鳴が流れて来た。
「うるさいね」
警官と看護婦は口に手を当て大声で話し始める。
「もっと大きな声で。聞こえない」
警官は身を乗り出した。
「この人にね、自分の服を着て、早くここを出たいのかって聞いてみたのよ」
「だから自分が今、どういう所に居るのかわかっていないんだろう」
「そういう事ね」
突然、隣室の音は止んだ。その後に相変らず二人の力一杯の声が行き来した。

ここに居ていいのなら、黙ってこうしていればいいことだった。そうして、このベッドを取り囲む一日の風景から自分の一日のすべては作られて行く。ふと、間借りしている部屋の雨戸を全部閉めて出て来たことを思い出す。いつ迄もここにこうしていられると思う。慎子は部屋の中を見廻した。隅に隣室から戻って来た看護婦が、白衣を私服に着換える後姿が見える。

「帰るのか？　君が帰れば、結局、俺一人ここに残されるわけだな」

警官は云った。

「そうよ。いつもそう。私達は患者が意識を回復するまでなのよ。その後は全部、貴方達警察の管轄なのよ。ずっと前から、そう規定できまってるんだから」

「誰がきめたのか知らんが、貧乏くじはいつもこっちだな」

看護婦は、白いズック靴を革靴に履き代えると、歩き出した。

「じゃあね」

戸が開いた。やがて転がって行く靴音が廊下に響く。

「ああして結局、皆逃げて行く。面倒なことは警察に押しつけて。聞こえるだろう。逃げ足は早いぜ」

慎子は目を閉じた。靴音は騒音と一緒に流れて行く。ふと自分を取り巻いていた周囲の一つが、今、欠け落ちて行くのを感じる。

角を曲がったのか、靴音は急に小さくなった。欠け落ちた物が、今、一直線に地底に向い落下して行く——ふとその音を聞くように思う。

看護婦が閉めずに行った戸口から、廊下の向う側の騒音が入って来た。待合室にマイクの呼び名が流れると、スリッパの音が診察室のある奥へ向って行く。

看護婦が欠け落ちて行った部屋の中の空間に、その騒音は真直ぐ流れて来た。

警官は腕を伸ばし思い切り硝子戸を閉めた。閉ざされた部屋の中に隣室の悲鳴が再び甦った。

「すさまじいだろう」

「女ですね」

「女さ」

ベッドの端に腰掛け、警官は帽子の記章を磨き始めた。

日がかげった。影は長く伸びて部屋を覆い硝子戸を通すと、廊下から待合室まで広がって行く。伸びる影の先を慎子は眺めた。

病人の黒ずんだ固まりは、さっきから一人ずつ崩れ始めていた。

「黙ってるんだね。君は」

「……」

「ね？　何も聞かないんだね」

「……」

いつ迄もこうしていていいことがわかれば、他に聞く事はなかった。ただ開けた周囲と向い合う。

「冗談じゃあない。こっちは早く帰りたいよ。長い間、君の番人やらされて来たんだから」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo